「ペスト」の作家が見つめた死刑
カミュの「ギロチン」
死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）
東京都荒川区南千住1-59-6-302
http://sobanokai.my.coocan.jp/

報道陣臨時待機所のテント
（東京拘置所6月26日）

コロナ・ウイルスの世界的蔓延があって、フランスの作家、カミュの小説『ペスト』が改めてよく読まれているそうです。カミュは『ギロチン』というタイトルの死刑制度を批判する論文を発表しています。

★☆★

カミュの父親は当時（「第一次世界大戦が始まるすこし前」だそうです）公開で行われた死刑執行の現場を見に行きました。そして大変なショックを受けて帰ってきました。**「それは犯罪におとらず不快なものであり」「この第二の殺人は……もっとひどい汚点をつけ加える」**とカミュは述べます。

その論文が書かれていた頃（１９５７年）、フランスでは**「死刑の執行はもはや公然と行われなくなり、監獄の中庭で、限られた数人の専門家の前でとり行われ」**ていました。カミュは、そのような死刑には、父にショックを与えたような「みせしめ」としての犯罪抑止力もない、と批判します。

「予防にもならずただ罰するだけである刑罰は、まさしく復讐とよばれるべきものである」「人を殺したものは死ななければならない。この場合問題になっているのは感情である」「たとえ殺人が人間の自然の姿であっても、法律はそのような本性〔自然〕を模倣したり、再現したりするためにつくられているのではない。法律はその本性を矯正するためにつくられている」

★☆★

このカミュの論旨は、そのまま今の日本の死刑制度のあり方への批判としても読めます。日本の死刑執行はカミュの時代のフランス以上に秘密裡に行われているだけでなく、執行に至るまでの死刑囚の日々の姿も見えなくされています。確かに「犯罪被害者のことを思えば死刑もやむをえない」という人は多いのですが、しかし、法律は本来、そのような報復感情を追認するために作られているのではない、とカミュは指摘しています。

そして、死刑と同じように婉曲に語られがちな重い病気と比較します。**「違っている点は、決して誰も癌（がん）が必要であるなどとは言わないのに、死刑は遺憾ながら必要であると平気で言われていることである。必要であるという理由から殺すことを正当とみなし、遺憾なものであるという理由で、それについて語ろうとしないのが当然だとされている」**と。

★☆★

カミュはこの論文を発表した数年後（１９６０年）、自動車事故で亡くなり、死刑廃止の日を迎えることはできませんでした。フランスで死刑が廃止されたのは、１９８１年、ミッテラン社会党政権が誕生し、死刑廃止を主張するバダンテール氏が法務大臣に就いてからのことです。

★☆★

今、コロナ禍に「自粛」しなければならないことの多い社会で、望ましい未来を構想する余裕はないかもしれません。しかし、「死刑のある日常」に戻る必要もありません。

日本の法務大臣の死刑執行後の記者会見にカミュが居たら、どんな厳しい質問を投げかけることでしょう。（J）